

# 声を聴くこととオーラリティの社会的可能性

小林 多寿子\*

本稿は「聴覚社会学」というテーマのもとで、個人的経験をオーラルに表現する声とその声を聴く行為を再考する。声の録音-再生機能というテクノロジーの発達がインタビュー調査になにをもたらしたかをふまえて、約20年前におこなった1人の日系カナダ人一世のライフストーリー・インタビューを再生して声を聴き直すことを実践し、聞き手としての関係形成的な聴き方を確認する一方で、再生された声の現前性から、声のなかの他者の声を聴きわけ、間接話法で表現される他者の声を具体的にとりあげる。そして声の「領有」のありようのなかに自己と他者の関係性をみだし、オーラルな語りの多声的な特徴の意味を検討している。さらに語り手が病のために声を失うという事態に遭遇して、声が伝達のコミュニケーションだけでなく、声の共同性や「自己・触発」、声の自己回帰的特質をもつことをあきらかにしている。インタビューを声として再聴し、聴く行為を実践することによって聴覚と視覚の特徴をあわせもつ「声のエクリチュール」を論じていることを再認している。結局、オーラリティにもとづく研究とは、統合的で調和的、累積的な聴覚の志向をふまえて声のなかにあらわれる個人の歴史性や自己再帰性を汲みあげながら、パロールとエクリチュールの相互性のなかで人間の「ライフ」の理解をめざす社会的な研究として展開可能性があることを論じている。

キーワード：オーラリティ、聴く行為、声のエクリチュール

## 1 声を聴くことへの視点

私はいままでなにを聴いてきたのであろうか。「聴覚社会学」というテーマを投げかけて私自身のこれまでの研究を再考するとき、人がなにを語るのかは問うてきたが、私が語りをどのように聴いてきたのかは考えてこなかったことに気づく。ライフストーリー・インタビューの場においてたしかに語りに耳を傾け、聞き取りをおこなってきた。録音した語りをトランスクリプトのために何度も聞き直した。そして聞き手としての私が語り手といかに共同制作しているかを論じてきた。だが、聴く行為や聴いた声について考えたことはあったのだろうか。本稿では「聴く」とい

\* 日本女子大学人間社会学部教授 kobaya@fc.jwu.ac.jp

う言葉を「注意して耳にとめる、耳を傾ける」という意味で「聞く」よりもいっそう意識して聴覚を働かせる行為としてとらえ、語りの向けられる宛先としての私の耳に届く声を手がかりとして、声を聴くことをめぐる問題を考えてみたい。

そもそも「聴く」とはいかなる行為なのか。近年の「聴く」ことを主題化した議論はこのような聴く行為の再考にとって示唆的である。「聴く」ことの力を論じる鷺田清一は、聴くことが単純な受動的行為ではなく、他者のことばを受けとり、受けとめる行為であるとし、臨床哲学という観点から「他者の自己理解をひらく」行為として考察している（鷺田 1999）。鈴木智之もまた臨床の場での議論をふまえて、聴くことをめぐる2つの位相をあきらかにしている。語られたことを解釈し意味世界に包摂する「構築」という位相に照準してきた語りの研究に対し、「ただ聴くこと」という対話のなかで他者へ向かうだけにとどめる「応答」の位相があることを指摘する。「聴く」ことの考察にとっては語りを「構築」と「応答」の相補的循環として問い直す論点は重要である。「聴く」という視点を導入することでインタビューがたんに共同制作的な構築の場であるだけではなく、「聴く」という行為そのものが果たしている役割を浮上させている（鈴木 2008）。

これらの議論から触発されるのは、聞き手でありつづけてきた私と私の聴く行為を含めて自らのインタビュー、そしてフィールドワークそのものを「聴く」という観点から問い直すことである。私が聴いてきたのはさまざまな人びとがそのライフを語る「声」である。個人的経験がオーラルに表現される声をそのオーラリティ<sup>1)</sup>を重視して研究してきた。では、そこで聴く声とはなにか、声を聴いて論じるオーラリティの研究はいかなるものなのか。

この問いに対して2つの観点から考察したい。ひとつはインタビューを声に注目して再考することである。検討の対象としてとりあげるのは約20年前に私がおこなったインタビューである。当時のインタビューテープを再生して声を聴き直す。オーラルなコミュニケーションの場としてのインタビューを、語る／語られるという構築的な場から、聴く／聴かれる／聴こえてくるという聴覚的な場としてとらえ直してみたい。

いまひとつは、再生された声をめぐって、パロール（話し言葉）とエクリチュール（書き言葉）という対立的に論じられる二分法的観点を考えることである。インタビューで録音された声はトランスクリプト、つまり文字に起こされて分析されることが多い。インタビューのトランスクリプトとは声が文字で読まれるという「声の視覚化」である。トランスクリプトによって声は聴覚を離れ視覚の対象となり、論述されるとき、「声の視覚化」はさらに進む。本稿ではインタビューでの声を聴覚の対象として取り戻しつつ、個人的経験をオーラルに表現する声の特徴とその声を論じることをパロールとエクリチュールの相互性という視点から再考しようとおもう。

## 2 声の記録と再生

インタビューを声に注目して再考するとき、一方で声の特徴をふまえる必要があり、他方で、録音機器（テープあるいはICレコーダー）と声の関係を考えなければならぬ。声とは〈現在〉である。声は「いま-ここ」で発せられる現在性と、発声と同時に消失していく一瞬のものという瞬間性がその特徴である。今日のインタビューは、たいてい語り手の許可を得て録音機器を作動させ、録音されている。瞬時に消えていく声を保存するテクノロジーは19世紀末より考案されており、エジソンは1877年に蓄音機を発明したとき、口述記録と再生の装置として考えていたといわれる（吉見 1995: 75-8）。その後のテープレコーダーの開発と音声録音技術の発展がインタビューの声の保存と再生を可能にしている。携帯可能なカセットテープレコーダーは1970年代に普及したが、近年のライフストーリー研究の先駆けとなった『口述の生活史』において、中野卓はつぎのようなテープレコーダー論を展開している。

テープレコーダーは話者の話したことをその話しっぷりまで確かに客観的に記録する。音のともなうかぎり、その場の状況は、それに記録されている。柱時計の音、近所の人々の声、私にお茶を入れて下さる音、一層大切なのは私自身のこともそこに記録されてしまっただけでなく、話者の相手であったときの私についても考えることができる。（それは、単に面接調査法のまずさについての反省だけのことではない、話者との関係において再発見される私自身のありかた自体の反省に及ぶ。）（中野 1977: 287）

中野が指摘するのはテープレコーダーの保存機能と再生機能がインタビュー調査になにをもたらしたかということである。テープレコーダーは語り手（中野の言葉では話者）の話をその「話しっぷり」もふくめて留めるだけでなく、インタビューの場のあらゆる音を拾って録音しており、インタビュー環境の音声記録となるものである。声の瞬間性に対して、その保存機能によって声の現在性を保持しつつ、発声時の状況依存性を離脱させ、発声の文脈からかけ離れた時間と空間でいつでも何度でも再生可能なものとさせる。テープレコーダーの保存-再生機能による声と声を取りまく環境の忠実な記録性、声の文脈離脱性と再文脈化自在性、録音された声の複製可能性はいまでは録音機を用いるインタビュー調査の前提となっている。

オリジナルな声はすでに消失しているのに、機械化された声は複製可能であり、増殖されうる。ベンヤミンが『「いま」『ここに』しかないという芸術作品特有の一

回性が完全に失われてしまっている」(ベンヤミン 1970: 12)と述べた複製芸術と同様、オリジナルな声の一回性は当然失われている。だが、機械化され再生される声は、ベンヤミンがオリジナルでは考えられない状況に複製芸術を置くことができると述べたのと同じように、元の発声状況を離脱した文脈におくことが自在である。ただし、再生される声は「アウラ」を失った複製としてオリジナルの声といかに異なるのかまでは問われていない。

中野が指摘するテープレコーダーがもたらしたもうひとつの重要な点は再生される声の再帰性である。テープは聞き手である調査者自身の声も録音しており、再生機能がインタビューを自己反省的にとらえる契機となった。再生された調査者の声は調査者自身の発話を組み込んで考えさせることを導き、ライフストーリーの共同制作性や構築的な場としてのインタビューの議論へ進んでいった<sup>2)</sup>。

しかしながら、ライフストーリー・インタビューではトランスクリプトのために何度もテープを聞くとする作業はするものの、トランスクリプトの終了後にテープを聴き直すことはすくなくとも私の場合はほとんどなかった。声を文字に変換したトランスクリプトをもとにライフストーリーを分析してきたのである。トランスクリプトにもとづいた研究とはオーラルな語りをエクリチュールとして、ウォルター・J・オングのいいかたでは「オーラリティ」としてではなく「リテラシー」<sup>3)</sup>として考察していたことになる。

オーラルな語りをそのオーラリティを尊重して再考できないだろうか。そこで声を聴き直すという発想を得たのがエスノメソドロジーの会話分析での議論である。とくに会話分析では会話を繰り返し再生して聞いているという。ジョージ・サーサスによれば、会話分析の特徴は相互行為的現象の秩序あるいは規則性の発見、記述、分析を目的とする方法論的視点にあるが、そのためには会話を録音（あるいは録画）し再生することが基本的な事柄である。

「もともとの録音と録画を保存しておけば何度も繰り返し見て聞いたりできる。このような再生の過程で、以前には見落としていた相互行為の様々な局面に気づき、それを明らかにすることができるようになる」(サーサス 1998: 105)。

会話分析において録音はトランスクリプト作成のために要求される手段であるが、サーサスのいう相互行為の発見は録音後に「繰り返し聞く過程」と「トランスクリプトの過程」という2つの過程によってもたらされた。「繰り返し聞く過程」とは聴覚を働かせる過程であり、「トランスクリプトの過程」とは聴覚と視覚を同時に用いる過程である。ライフストーリー法では区別されていないこの2つの過程のなかでも、とくに「繰り返し聞く過程」という聴覚を重視した過程があらたな現象の発見をもたらしていることに注目したい。

### 3 声をふたたび聴く

そこで私がおこなったインタビューのテープを再生して声をふたたび聴くことを試みてみよう。インタビューは1988年から89年にかけて3回にわたり日系カナダ人一世であるAさんにライフストーリーを語ってもらったものである。録音された計約8時間の語りは私がトランスクリプトして、すでにいくつかの論文でかなり詳細にそのライフストーリーを分析し呈示している（小林1992, 1994, 2000）。Aさんのインタビューを再聴するのは、オーラルな語りの豊かさがライフストーリーの多面的な分析を可能にしてくれたこと、そしてそれら先行の分析をさらに活かして「声」と「聴く」行為を考えさせてくれることによる。もうひとつ重要なのは、後述のとおり、「声を聴く」という本稿のテーマにとって人間の声とはなにかと問い直させることがインタビュー後のAさんに起こっていたからである。

Aさんのライフストーリー分析の論点のひとつに、語り手と聞き手の関係性がいかに語りの内容のレベルに影響を及ぼしているかをコミュニケーション論的にあきらかにしたものがある。インタビューを重ね「親密」な関係になるほどに多義的な解釈の語りやネガティブな経験の語りがあらわされることを具体的な発話と語りの内容の関係性のなかにみいだしている。この点をふまえて「聴く」という観点から私はどのような聴く行為をおこなっていたのかを確認してみよう。

インタビューを聴き直すと、聞き手である私はあまり問いを発しておらず、「あいづち」をうつことを重ねていた。語り手の語りたいことを語ることをうながし、できるだけ聞くことに徹するというのが調査者としてインタビューに臨む私の方針であったからである。だからたんに「問い」を出し答えを求める情報伝達的コミュニケーションではなく、語ることが促進されるための〈親密さ〉を築くという関係形成的コミュニケーションをめざした聞き方をしている<sup>4)</sup>。

具体的な聴く行為において、「あいづち」は、語り手の発話を受けとめ、語り手の語る経験に理解や共感、同意をあらわし、肯定的評価を示して語り手の経験そのものを支持するメッセージとなっている。「質問」は、情報伝達のコミュニケーションであるのに対して、「あいづち」は、ある種、マルチン・ブーバーのいう「我-汝的」コミュニケーションとしてインタビューを超えて、人間としての語り手への共感や受容につながり、全人的関係へ発展していく可能性を含む（加藤1986: 2-40）。

語り手の声と聞き手の声、2つの声の往来に注目すると、たしかに聞き手の声から関係形成をめざす聴く行為のありかたがみいだされる。では、語り手の語りは声としていかに聴こえてくるのか。

#### 3.1 声のなかの声

20年前のインタビューを再聴すると、Aさんの暮らす老人ホームの部屋の様子

が思い浮かび、Aさんの声はここに生き生きと立ち現れ、現前化する。20年前のインタビューである私の声も聞こえてくる。ジャック・デリダのいう声の現前性<sup>5)</sup>がまさにここにあり、声の「肌理」(鷺田 1999: 191) もリアルに聴こえてくる。Aさんの声は低く小さくすこししゃがれ、ゆっくりとていねいに発せられる。けっして単調な声ではなく、抑揚や音声の高低が語りの内容と連動している。葛藤や辛い話では声はさらに小さく低くなり、いっそう聞き取りにくくなる。聞き手である私の声は、「ええ」「ああそうですかあ」、あるいはうなずくときの「はあ」というあいづちばかりがときおり挟まれる。

再生される声を聴くと、トランスクリプトに書き起こされていないことがいかに多くあるかがわかる。老人ホームの同室の人をはばかりときに低められる声、語りがとぎれたときに次の話題を探す間合い、夕暮れが近く薄暗くなっていく部屋のなかでベッドの横の狭い場所に椅子を並べて至近距離で対話している私たちの位置どりでから右側のインタビューーに語りかけようとして聞き手の私には左側から聴こえる(ような気がする)声、3時間以上も小さなパイプ椅子に座って語り続け、腰に手をあてて伸びをする都度にうわずる語り手の声。このような声の抑揚や間合い、しぐさや外況から、声を発したときの〈現在〉には文字に写せない語りの空間や外観もふくめた語り手の状況があった。再聴するときは、声の現前性が聞き手であった私の経験を想起させ、その想起されたイメージが現前化された声に重なっている。

声の現前性のなかであらたに他者の声が聴きわけられるようになる。それはAさんが人生のなかで出会ってきたさまざまな他者たちの声であり、その他者の声がAさん自身の声によって再生されている。他者の声とはかつてAさんと対面関係にあったコンソシエーツの声である<sup>6)</sup>。コンソシエーツは、アルフレッド・シュッツが過去－現在－未来という時間次元をもとに類型化した先行者－同時代者－後続者という他者のなかでも(ナタンソン編 1985: 150-1)、同時代者のうちでとくに時間と空間を共有して対面関係をもつ人びとをさしている(ナタンソン編 1983: 65)。コンソシエーツは、空間を共有してたがいに到達可能な範囲に存在し、時間を共有してたがいを現在形で把握している。ライフストーリーを語るということは、つまり「伝記的状況」を構成する他者を語ることである。とりわけ時間と空間を共有して生きた経験のあるコンソシエーツを語ることである。コンソシエーツ同士はそれぞれの「伝記的状況」にある個人としてたがいの独自性をとらえるとともにたがいのライフに参与し、たがいのバイオグラフィに包絡されている(シュッツ 1983: 65)<sup>7)</sup>。

語り手の声のなかの声にさらに耳を澄ませると、コンソシエーツとしての他者にも大きく分けて2種類あることが聴きわけられる。家族や友人のような日常に継続的に対面関係にあった身近な他者の声と、たとえ一回限り出逢っただけであっても人生にとって重要な意味をもった他者の声がある。

### 3.2 間 接 話 法

他者の声は語りのなかに間接話法で表現されている。間接話法とは他者の言葉を自分の言葉で話す話法である。つまりAさんが耳に記憶する他者の声がAさんの声で置き換えられ、表現されている。声のなかの他者の声の実際を2種類のコンソシエーツに即して2つとりあげてみよう。ひとつは身近な他者としてのコンソシエーツの声であり、いまひとつは一度の出逢いが意義をもつ他者の声である。

ライフストーリーは身近な他者の声に満ちており、とりわけ親や配偶者、子どもたちという家族の声が幾重にも織りかさなる。たとえば1890年代生まれのAさんが語る子ども時代には1900年代初めに聞いた父や母の声がある。もっとも古い声は1905年に弟が生まれ男子誕生を喜ぶ父の声であり、婚家での苦労を語る母の声がある。病気で手術し亡くなった夫の声、日本軍のパールハーバー爆撃を伝える長男の声等々、さまざまな身近な他者の声が聴こえてくる。そのなかでAさんにもっとも身近な他者であった夫の死をめぐる語りをとりあげてみよう。

Aさんの夫は1910年代からカナダ太平洋岸におもに鮭漁にたずさわる漁師であった。1941年秋、夫は体調を崩し、手術を受けたが、結局、手遅れで、余命が限られているとわかる。同じころに日米開戦となり、日系カナダ人の強制移動がはじまったが、夫が病床にあるため、日系人のいなくなったバンクーバーに残らざるをえなかった。42年秋にインターンメント・キャンプへ移動後、まもなく夫は逝去した。その一年のことを他者の声を織り交ぜてつぎのように語る<sup>8)</sup>。

A1: 1941年の10月、鮭場から早く帰ってきましたよね。「どうしたの?」言うたら、「やっぱり具合悪い」言うからよ。ちょうどそのときドクターHいうてオペレーションの上手な人あったのよね。その方に診てもらったら、「早くオペレーション、早よせんならん」、早くしたけど、もう手遅れやった。

手術を手がけた医師の母親と懇意にしていたので、医師が夫の余命を3ヶ月くらいと話していたことをAさんは医師の母親から伝聞で耳にする。

A2: ドクターHが自分のママさんに、「Aさんはかわいそうや、もう3ヶ月ぐらいしかもたん」というたのを、おばさんが私にいうてくれた。それ、私は子どもに隠してなんにもいわんと、退院しても寝てばかりいましたよ。

日米開戦の日、長男がパールハーバー爆撃のニュースを伝え、夫が漏らした声を忘れることができない。

A3: 12月7日の爆撃で、長男が2階で勉強してあったんが、ドンドンドンと降りてきて、「パパ、日本がパールハーバー爆撃したから、日本、アメリカと戦争なる」というたら、びっくりしてな、とてもびっくりしていました。だけ

ど、私、今思うとね、死ぬ人にはなにか予感があるんです。考えて考えて、もうほんとうにそれ聞いただけで落胆していました。しまいには「アメリカとやったら、日本、負けるやろ」て一言いうたのが私、頭に残っています。

1942 年秋、インターンメント・キャンプに着いて 49 日目に夫は逝去した。夫の死を知らせにきた医者声を聞く。

A4: えらい外でなにか声、聞こえたある。ドクター T みたいなおもうて、私、バンクハウス出てみたら、ヤッパリ T でね。そしたら、「A さん、さっき亡くなった」いうて来てくれたんですね。

A さんは亡くなった夫をキャンプ地で埋葬するよういわれるが、戦争後の再移動を予想して、茶毘に付すことを強く求めた。

A5: 49 日めに主人が亡くなりました。死んで嬉しいことはないけど、バンクーバーで死なれたら、葬式もできんでしょ、だあれもないから。私も英語がわからんし、手続きすることもできん。「ああよかった、スローキャン来てやったから」、ガバメントが責任もって葬式、葬式というようなことないけど、まあよくしてくれましたからね。「山の中に埋めよ」いうたけど、戦争でここへ来ているからね、「戦争済んだら、またどこへ行くかわからん、埋めやらん」いうてな、そして「焼いてほしい、お骨にしてもって行きたいから」というて、男の人 10 人だして、山で火焚いて、野火で焼いてもらいましたよね。

A さんの人生にとって重要な転機となった夫の病死に至る出来事は、夫の声、長男の声、医師の声やキャンプ当局者の声という対面したコンソシエーツの声を織り込んだ場面の描写であらわされている。この出来事についての語りは、夫の発病から死別へ至る個人の重大なライフステージと日米開戦からインターンメント・キャンプへの強制移動という歴史的出来事の交差する場面となっている。この場面での「いま-ここ」に想起される声は、「あのとき-あそこ」で発話された言葉のままであるかどうかはわからない。だが、語りの文脈にとりこまれた間接話法による他者の声は、他者の声を自己のものとするという、ある種、声の「領有」<sup>9)</sup>のありようを示していることに注目したい。

もうひとつのコンソシエーツの声は一度の出逢いであるにもかかわらず重要な意味をもった他者の声である。A さんは、終戦後、いったん日本への帰還を選んだものの取り消して、子どもを連れてインターンメント・キャンプからトロントへ再移動しカナダで生きていくことを選択している。その選択は学齢期の子どもたちを女手一つで育てることの決意であった。しかし A さんの「苦労」は、英語を話せないままシングルマザーとして働いたことよりも、日本に残した子どもが「不良」にな

ったことのほうが深刻であり、たまたまトロントを訪れた賀川豊彦に相談するほど「私を悩ました」ことであった。この「苦労」は賀川の声を変えてインタビューの都度に言及されており、終生、反復される声となっている。

A6：賀川豊彦先生、ご存知でしょ。あの先生が戦争済んで、初めてマッカーサーの OK で世界回ったことがある。トロントに来て、合同教会で講演がありました。それ聞いたときには私はなにをほっといても賀川先生にお願いして、たとえ5分間でええから、話聞いてもらって、あれを真人間になるように救ってもらおうとおもって、5分間でええから賀川先生に話聞いてもらえるように、役員さんに頼んでよ。

で、講演済んだ後でちょっと話、私は懺悔したのよね。そしたら賀川先生、「今はもう日本は食料も着るものもなにもかも不自由やから、だから毎月10ドルづつの送金が約束できるか」いうんですね。「はい、それはどんなにしてもします」。そしたら賀川先生は、「自分は日本に帰っても直接世話することはできん」よね。「けど、牧師に頼んで、ちゃんと心配のないようにするから、その代わり毎月10エンブつ送ってやってくれ」いうて、私、働いて毎月毎月金を……毎月送りましたよね。

賀川豊彦の声は、ただ歴史的人物という理由でその声が残ったのではない。賀川豊彦とは個人的問題の深刻さの度合を表象する名前であり、賀川の声はその意味連関と結びついて耳にとどまっている。

人生の各ライフステージでさまざまなコンソシエーツの声が自己の声に組み込まれて語られる。なぜその他者の声が自己の声に組み込まれているのか。ふと耳にした声が残ったり、たまたま出逢った人につけられた声忘れられなかったりすることもあるだろう。しかし声を再聴してわかることは、耳に残る声は偶然のようで実際には、なんらかの意味連関、シュッツのいう意味でのレリヴァンス（シュッツ 1996）をもつものである。自己の声で再演する他者の声はレリヴァンスをもつ声であり、反復され、自己の解釈で意味づけられ、自己の人生の文脈に位置づけられて所有される声であり、自己に適ったものにするという意味で「領有」された声である。

さまざまな場で対話した他者の声語りの中に織り込まれ、とくに他者の口調によって演戯性（川田 1992: 414）のある声で語られている<sup>10)</sup>。そのような自己と対話する複数の他者の声、そしてその複数の声をそれぞれの他者の口調をとりいれて発声する演戯性は、聴衆がインタビュアー唯一人であったとしても、口頭で話すことがもつパフォーマンスとして「声の饗宴性」を引き起こす（川田 1992: 136-7）。その演戯性は、過去にあった他者との対話における語り手の声をリアリティをもって私という聞き手に呈示させ、そして聴こえさせている。

### 3.3 自己の声

再生された声には、コンソシエーツの声に加え、Aさん自身の過去の声もまた聴こえてくる。たとえば前記のA1では、漁を早く引き揚げて帰ってきた夫に「どうしたの?」と尋ね、夫と対話する過去の自己の声がある。あるいは賀川豊彦と面談したとき、日本にいる息子に送金できるかと問われ、「はい、それはどんなにしてもします」と約束した自己の声と賀川が応答する声があり、対話形式で声はあらわされている。間接話法では他者の声を現在の自己の声で話すだけでなく、その他者の声に応答した過去の自己の声も現在の自己の声で話している。

現在の自己の声であらわされる過去の自己の声には、他者の声と対話する自己の声だけでなく、独白の声も含まれている。前記のA5ではキャンプ地で夫が死去したことについて、「ああよかった、スローキャン来てやったから」という独白の声がある。この独白の声は、夫の逝去の地がバンクーバーではなくスローキャンというインターンメント・キャンプ地であったことを自分の家族の置かれた状況を考慮するとよかったとする判断を表現した声である。この独白の声は過去の自己の声であるだけでなく、そのような過去の自己の解釈を確認する現在の自己へ向けた声であり、そのような解釈を聞き手である私へも示す声である。

現在の自己の声のなかに他者と対話する過去の自己の声があり、そして独白する自己の声が織り込まれている。これは声における自己の再帰性をあらわしている。アンソニー・ギデンズが「自己アイデンティティとは生活史 (biography) という観点から自分自身によって再帰的に理解された自己」(ギデンズ 2005: 57) であることを論じているが、過去の自己の声を現在の自己の声に組み込むことは自己の軌跡を確認し自己理解に資するものであり、自己の再帰的行為なのである。

## 4 多声性と複数の〈現在〉

声として聴き直す語りからなにがわかるのか。Aさんの語りはすくなくとも2つの意味で多声的である。ひとつは、声のなかの多様な声という意味での多声性である。多声性とは、異なった主体の発声した声が間接話法によって集約されていることをさしている。ここでいう多声性は、ミハイル・バフチンのいうポリフォニー性の概念に触発されているものの、バフチンが前提とした各声の主体の自立性と対等性をそなえたものとはみていない(バフチン 1995: 9-95)。むしろ、相互行為において交わされたさまざまな他者の声が自己の声で置き換えられるとき、そこに他者の声と自己の声の集約と「領有」がみいだされること、そのうえで演戯性をともなった間接話法によるオーラルな表現が多声性として聴こえてくることをさしている。

いまひとつ、多声的なのは複数の〈現在〉があることによる。声はインタビュー時点を〈現在〉とする。だから、声には、3回のインタビューでのそのときどきの〈現在〉がある。さらに再生された声を聴くとき、オリジナルな声を聞き手として聞いた〈現在〉とは異なった、録音され再生された声を聴く〈現在〉があり、それ

は機械によって生成される〈現在〉である。発声の瞬時から消えていった声とは別に、録音技術のおかげでたえず再現前化が可能となった声の〈現在〉がある。オリジナルな声を聴いた〈現在〉と再現前化された声を聴く〈現在〉があり、さらに幾度となく再現前化される〈現在〉が生じていく。聴く私は20年前のインタビューの聞き手であった私自身と同一人物であるものの、その声を聴く文脈は同じではない。だから再生の〈現在〉にはオリジナルのインタビューでは聴きとれなかった声がさまざまに聴きわけられる。複数の〈現在〉の声を聴く／聴きわけるというその意味でも多声的なのである。

多声性は「代替的な声 (alternative voice)」という観点からも論じることができるだろう。グブリアムとホルスタインがそのインタビュー論のなかで、声の概念をめぐるでだれがどういう立ち位置から話しているのかという点から語り手が「代替的な声」を出す可能性について指摘している (Gubrium and Holstein 2001: 21)。Aさんは日系カナダ人一世のライフストーリーを語ってもらうためにインタビューされており、自己の立場を一世と認識してその立場から声を発している。「代替的な声」というのは他の役割をもつものとして尋ねられたら違う声がありうることをさしている。Aさんの声はカナダ社会におけるエスニック・マイノリティの声としても、第二次世界大戦中のインターンメント経験を語る歴史的証言の声としても、老人ホームで暮らす高齢女性の声あるいはかつて縫製業にたずさわった労働者階級女性の老後を語る声としても聴くことができる。一人の人は1つの声だけではなく、複数の役割やアイデンティティに応じたさまざまな声を発する多声性をもちうる。

## 5 失われた声

1年以上かけたフィールドワークのなかでAさんへのインタビューは可能な限り回を重ねていきたいと考えていた。しかし4回目のインタビューはなかった。Aさんは3回目のインタビューの3ヵ月後、脳血管障害の後遺症で声を発することができなくなり、声を失ってしまった。他者の話は理解できるが自分が話すことのできない表出性失語症となり、オーラルなコミュニケーションが不可能となった。以後、病床にあるAさんとの4回のエンカウンター<sup>11)</sup>は、録音されるインタビューの場ではなく、一方向の語りかけと非言語的応答か、食事の介助や手を握るという身体的接触、あるいは横にたたずむだけの時間となった。声のないエンカウンターだからこそ、失われた声から声とはなにかを考えさせてくれたとおもう。

私の声は聞こえており、私の語りかけはわかる。しかしAさんは、発声して応答することはできず、指さしやうなずきで意思表示は可能であるものの、従来のような対話的コミュニケーションができなくなった。そのもどかしさが募ったのか、目頭に手をあて嗚咽する姿のそばにたたずんでいると、声を失うことの悲しみが伝わってくる。

声を失う悲しみとは、なによりも声の共同性を喪失したことに由来するだろう。

川田順造の『聲』によれば、声を発することは、声を発する行為を支える状況性、声を発する者の現前性、声の向けられた相手の特性性をまきぞえにして成り立っている（川田 1988: 5）。声は自己と他者との関係のなかで顕在化するものであり、その点で声は共同的なものである。声による共同性を得られなくなったことが声の主体にいかに深い悲しみをもたらすかその涙が示している。

だが、悲しみは共同性の喪失やオーラルな対話的コミュニケーションがおこなえないことの不全感だけによるのではない。デリダは、声は自分を聞くという、つまり声を失うことは自分の声が聞けなくなることである。デリダによれば、誰かに語りかけるとき、その語りかけることは自己によっても聞かれており、「自分が語るのを聞く」ということは声の力である。自己が語るのを聞くという活動は他に類のない「自己－触発」（デリダ 2005: 172-7）である。外在的な媒介なしに自己の話を聞いたり、自己に語りかけたり、自己が産み出すものによって触発されたりすることをさして、デリダは声の現象学的力として論じている。声の生き生きとした現在にあらわれる現前性は、語りかける他者にとってだけでなく、自己への現前としてもとらえるべきことを示している。

「自分が話すのを聞く」ことができなくなったがゆえに「自己－触発」が阻害されたこと、それは声によるコミュニケーションのもつ自己回帰性にかかわる問題でもある。声によるコミュニケーションには自己回帰的性格が指摘されている。西アフリカ・モシのオーラルな社会を研究した川田は、粉ひき場でモシ女性がうたいながら心のなかのわだかまりを発散しているようにみえる様子を「声のアジュール」としてとらえている。つまり自分自身の発することばをかみしめ、それにひたっているようにみえる「声のアジュール」のなかに、声のもつ拡散伝達性ととともに自己回帰性というコミュニケーションの特質がみいだされる（川田 1992: 45, 108）。

失われた声は、声の共同性、声の「自己－触発」、そして声の自己回帰性がいかに自己に力をもっているのかを示している。

その後、フィールドワークを終えて帰国した私の元にAさんの逝去を知らせる手紙が届いた。生き生きとした現前にある声を聴くことはもはやできない。そして録音された声は発声の主体を失ったまま、発声時の〈現在〉を保持して残っている。

## 6 オーラリティの可能性

個人的経験をオーラルに表現する声を聴覚の対象として取り戻しつつ、声と声を聴くことについて考えてきた。この考察は、オーラルな語りの研究がそのオーラリティを尊重していかに展開可能であるかを考えるもうひとつの論点へ接続する。先にあげた「聴くこと」をめぐる臨床的議論や中野卓以後のライフストーリー研究の隆盛、グブリアムとホルスタインが論じるインタビュー社会の到来（Gubrium and Holstein 2001: 9-10）という動向が示唆するのは、声を聴く研究としてのオーラル・スタディーズが拓かれていく可能性である。今後、オーラリティを活かした研

究はどのようにありうるのかを考えていくために、聴くことだけでなく聴いたことを書くということも念頭において、1つは聴覚とはなにか、2つにはパロールとエクリチュールという二分法をいかに考えるのか、この2つの要点を検討しておきたい。

第1に、声を聴く聴覚とはどのような特徴をもつ感覚なのだろうか。オングは、『オーラリティとリテラシー』のなかで (Ong 1988: 72-3 = 1991: 153-7)、視覚と対比させながら聴覚の特徴を論じ、「音のエコノミー」という観点をだしている。視覚が切り離す感覚であるのに対し、聴覚は音が統合する感覚であり、聴覚にはハーモニー、つまり1つにする (a putting together) という統合志向がある。そして視覚が一どきに一方からしかやってこないのに対して、聴覚には同時にあらゆる方向から音が集まってくるという音の中心化作用がある。聴覚の世界では私たちはその世界の中心におり、音がもつ中心化作用は私たちを統合的で調和的な志向へ導くものである。このように聴覚は統合し中心化し内面をつくりだす「音のエコノミー」の作用をもたらししている。オーラル・スタディーズはこの聴覚の特徴をふまえ「音のエコノミー」と調和した研究をめざすことになるだろう。それは分析的というより累積的傾向をもち、状況依存的な思考であると同時に人間をホーリスティックにとらえる志向となる。

第2に、オーラリティの研究においてパロールとエクリチュールという二分法ははたして対立的に論じられるべきものなのか。オーラリティを活かす研究は、統合的で累積的な特徴をもつ聴覚によって聴きとられるオーラルな語り、すなわちパロールをとらえるところから展開されていく。聴覚の特徴は、耳に届くパロールだけでなく、そのパロールをトランスクリプトしたエクリチュールにも包含されているはずである。

「パロールの優位」という議論がある。デリダの『声と現象』の訳注 (デリダ 2005: 306-7) において、訳者の林好雄は、プラトンの『パイドロス』のなかでソクラテスが語る言葉を引用しながら伝統的な西洋哲学におけるパロールとエクリチュールの対立とパロールの優位が説かれていることを指摘して、デリダの議論を補足している。プラトンは、エクリチュールがパロールに劣る点としてエクリチュールはだれに読まれるかわからないこと、つまり読者を特定できないし、意図しない解釈がなされても抗弁することができず、エクリチュールには即座の応答力がないことをソクラテスにいわせている (プラトン 1967: 136)。このようなオーディエンスの非選択性、即応力のないコミュニケーションに対して、パロールは、オーディエンスの選択性のもとにあり、生命をもち、魂をもった言葉として自分をまもる力を備えているという。

たしかにエクリチュールによるコミュニケーションは、現代のEメールであってもパロールを凌ぐ即応力をもたず、この点にかぎるとパロールの優位を主張できるかもしれない。だが、オングがいうように、プラトンは音声中心主義を打ちだしたものの、この主張が書物に書いてなされたこと、つまりパロールの優位を説くた

めにエクリチュールに拠ったことは、逆にパロールの限界を示している（オング 1991: 168-9, 340-1）。パロールとエクリチュールは対立的二分法でとらえて、どちらかの優位を論じるべきものではなく、むしろパロールとエクリチュールの相互性という観点からの考察が必要であろう。

インタビューで録音された声をトランスクリプトして分析する研究は、パロールからエクリチュールへの変換とエクリチュールによる論述をめざしている。だが、パロールにもとづいた研究であつかうのはたんなるエクリチュールではなく「声のエクリチュール」であることを再認すべきである。インタビューでは聴覚を働かせてパロールを聴きとり、声のトランスクリプトでは聴覚と視覚を同時に働かせている。テキスト化された「声のエクリチュール」には聴覚の特徴が包含されている。オングの議論をふまえれば、「声のエクリチュール」は、たんなるエクリチュールと異なり、「テキストの外部の文脈」をもつ、再生された声を聴くときにみいだされたトランスクリプトに書き起こされていないこととはまさにこの「外部の文脈」である。「外部の文脈」は声が発せられた本来の環境であり、なまの人間の生活がいとままれていた〈現在〉のことである。ことばだけの文脈に閉じこめられるのではなく、ことばであらわされる以上のものを含んでいる。

オーラリティの社会学的研究は、双方向的で相補的、互恵的であるようなパロールとエクリチュールの相互性を前提に考えるとところからはじまる。とくにライフストーリーのような個人的経験が表現されるときには、オリジナルな声というパロール、機械化された声というパロール、「声のエクリチュール」、あるいはエクリチュールで表現した自己の経験をふまえてインタビューで語るパロールとしての声<sup>12)</sup>等々、さまざまなパロールとエクリチュールを往復する相互的な形態がある。だから聴覚とはなにかをふまえたうえで、声として再聴し、聴く行為を実践することで、オーラリティを活かす可能性が拓かれる。

本稿で試みたのは、オーラリティ研究のテキストが「声のエクリチュール」であることを再認し、さらにそのオーラリティの可能性を探ることであった。オーラリティにもとづく研究とは、統合的で調和的、累積的な聴覚の志向をふまえて声のなかに聴きわけられる自己と他者の関係性、声のなかにあらわれる個人の歴史性や自己再帰性を汲みあげながらパロールとエクリチュールの往復のなかで人間の「ライフ」の理解をめざす研究として展開されることが期待されている。

#### 【注】

- 1) 「オーラル」という言葉は「口頭の、口述の、声の」という含意で用いる。「オーラリティ」は、オングの邦訳では「声の文化」あるいは「声としてのことば〔の性格〕」と訳されているが、本稿ではオングの用い方を包含しつつ、「口述性」を主な語彙とし、カタカナで記す。
- 2) たとえば、中野卓・桜井厚編（1994）。
- 3) オングの「リテラシー」は「読み書き能力」よりも「オーラリティ」と対比的に文字を用いて書くことおよびその文化を指す。

- 4) 個人的経験が語られるときに聞き手が語りをうながす場が生成される過程を〈親密さ〉の形成過程としてとらえ、語り手と聞き手の対話のなかにこの過程の実際を析出している。聴く行為はこの過程を含んでおり、語り手の発話に対する聞き手の応答にその具体的な行為があらわれている。
- 5) デリダの「現前」とは、根源的直観に対して事象が「根源的能与性」として立ち現れることを指し、その時間的なあり方を「現在」としている（デリダ 2005）。本稿で現前性は「いまここに」直接にありありとあるものとして立ち現れること、また再現前化は現にない対象を想起によって現前することが可能であることを指している。
- 6) 「consociates」は、邦訳では「共住者」「共在者」等、複数の訳語があり、「共在者」がシュッツの意味するところに近いと考えるが、本稿では「コンソシエーツ」とカタカナで表記する。
- 7) 「伝記的状况 (biographical situation)」は、シュッツが、私の状況とは社会的文化的プロセスのなかで構成された「つねに歴史的なもの」であり、「それ自体の歴史をもち、しかもその要素のいくつかは、もっぱら私自身の伝記的状况の内に在る出来事から成っている」（シュッツ 1996）と論じたことをふまえ、個人の歴史性としてとらえている。
- 8) 引用した A1 から A6 までの語りは 1988 年 10 月 4 日、1989 年 2 月 26 日、1989 年 5 月 1 日におこなった 3 回のインタビューのいずれかで語られたものである。A さんの発話のなかの「」は筆者が付加した。なお、インタビューは 1988～89 年カナダ政府リサーチスカラーシップによる調査でおこなった。
- 9) 「領有 (appropriation)」は、ロジェ・シャルチエがその書物論と読書論のなかで提起した概念に拠っている。シャルチエは、読む行為をたんに抽象的な知的行為ではなく身体を用いる行為であり、空間のなかに印づけられ、自己あるいは他者との関係のなかにおかれている行為としてとらえ（シャルチエ 1992: 9）、テキストを自分のものにするより熟練した読書能力を獲得するレベルで「読み」を論じ、「自分のものにする」という意味で「領有」として検討している（シャルチエ編 1992: 345）。シャルチエの議論をふまえ、聴く行為も音声を聴覚でとらえる行為だけでなく固有の場所性をもった空間のなかに位置づけられ、自己と他者の関係のなかにおかれている行為としてとらえ、聴こえてくることを「領有」する、つまり自分なりの聴き方をし、聴き分けるというより熟練した聴取能力を身につけ自分のものとする「領有」として聴く行為を考える。
- 10) 川田は、声のコミュニケーション機能として、オースティンの提起した情報伝達の側面と行為遂行的側面に加え、演戯的側面をあげ、演戯性が声によるコミュニケーションに根本的に重要な側面であることを強調する（川田 1992: 414）。
- 11) ゴフマンがエンカウンター論で指摘した対面的相互行為としてのコミュニケーションの特徴がみいだされる場を指す（ゴフマン 1985）。
- 12) A さんは長年、日記をつけていたが、個人的経験の表現において日記や自分史のようなエクリチュールとインタビューでのパロールとの表現の差異と相互性を指す。

## 【文献】

- バフチン、ミハイル、1995、『ドストエフスキーの詩学』望月哲男・鈴木淳一訳、筑摩書房。
- ベンヤミン、ヴァルター、1970、『複製技術時代の芸術 ヴァルター・ベンヤミン著作集 2』佐々木基一編集・解説、晶文社。
- シャルチエ、ロジェ、1992、『読書の文化史——テキスト・書物・読解』福井憲彦訳、新曜社。
- 編、1992、『書物から読書へ』水林章・泉利明・露崎俊和共訳、みすず書房。

- デリダ, ジャック, 2005, 『声と現象——フッサールの現象学における記号の問題』林好雄訳, 筑摩書房.
- ギデンズ, アンソニー, 2005, 『モダニティと自己アイデンティティ——後期近代における自己と社会』秋吉美都・安藤太郎・筒井淳也訳, ハーベスト社.
- Gubrium, Jaber F. and James A. Holstein, 2001, "From the Individual Interview to the Interview Society," *Handbook of Interview Research: Context & Method*, Sage, 3-32.
- ゴフマン, アーヴィング, 1985, 『出会い——相互行為の社会学』佐藤毅・折橋徹彦訳, 誠信書房.
- 加藤春恵子, 1986, 『「伝達」と「交わり」——ブーバーのコミュニケーション論』『広場のコミュニケーションへ』勁草書房, 2-40.
- 川田順造, 1988, 『聲』筑摩書房.
- , 1992, 『口頭伝承論』河出書房新社
- 小林多寿子, 1992, 「〈親密さ〉と〈深さ〉——コミュニケーション論からみたライフヒストリー」『社会学評論』42(4): 419-34.
- , 1994, 「インタビューからライフヒストリーへ——語られた「人生」と構成された「人生」」中野卓・桜井厚編『ライフヒストリーの社会学』43-70.
- , 2000, 「二人のオーサー——ライフヒストリーの実践と呈示の問題」好井裕明・桜井厚編, 『フィールドワークの経験』せりか書房, 101-14.
- 中野卓, 1977, 『口述の生活史——或る女の愛と呪いの日本近代』御茶の水書房.
- ・桜井厚編, 1994, 『ライフヒストリーの社会学』弘文堂.
- ナタンソン, モーリス編, 1983, 『アルフレッド・シュッツ著作集 第1巻 社会的現実の問題 [I]』渡部光・那須壽・西原和久訳, マルジュ社.
- , 1985, 『アルフレッド・シュッツ著作集 第2巻 社会的現実の問題 [II]』渡部光・那須壽・西原和久訳, マルジュ社.
- Ong, Walter J., 1988, *Orality and Literacy*, Routledge. (=1991, 桜井直文・林正寛・糟谷啓介訳『声の文化と文字の文化』藤原書店)
- プラトン, 1967『パイドロス』藤沢令夫訳, 岩波書店.
- サーサス・ジョージ, 1998, 『会話分析の手法』北澤裕・小松栄一訳, マルジュ社.
- シュッツ, アルフレッド, 1996, 『生活世界の構成——レリヴァンスの現象学』那須壽・浜日出夫・今井千恵・入江正勝訳, マルジュ社.
- 鈴木智之, 2008, 「他者と語り——構築と応答のあいだで」『三田社会学』三田社会学会編, 13: 3-16.
- 吉見俊哉, 1995, 『「声」の資本主義——電話・ラジオ・蓄音機の社会史』講談社.
- 鷺田清一, 1999, 『「聴く」ことの力——臨床哲学試論』阪急コミュニケーションズ.

## Listening to Voices and the Sociological Possibilities of Orality

*KOBAYASHI, Tazuko*  
*Japan Women's University*

kobaya@fc.jwu.ac.jp

This paper examines, from the perspective of “auditory sociology,” the oral expression of personal experiences and the act of listening to such voices. In consideration of the situation brought about by the development of voice recording/replaying technology, I re-listened to the voice of a Japanese–Canadian Issei recorded during a life story interview that I conducted about 20 years ago. While confirming how the interviewer develops a relation with the interviewee through listening, others’ voices in the presence of her voice—as expressed in indirect speech—are recognized and concretely addressed. The relationship between the self and others and the meaning of multi-voices in oral narratives are pointed out through the state of “appropriation” of voices. Additionally, as I faced a situation wherein the interviewee had lost her voice due to some illness, I discuss the characteristics of the voice not only as a means of transmission but also as communality—“auto-affection” and “self-recursiveness.” Re-listening to the interview as voices makes me realize that we discuss the “écriture of voice,” which brings together auditory sense and visual characters. I conclude that the study based on orality has the sociological possibility of aiming for an understanding of human life within the reciprocity of parole and écriture, while referring to personal history and self-reflectivity found in voices and considering a hearing orientation of being unifying, consonant, and aggregative.

Keywords: orality, act of listening, écriture of voice